

新課程で求められる学力をどのように養うか

愛知教育大学 教授 土屋武志

1 はじめに

今回の学習指導要領の改訂は、中央教育審議会答申に沿って、「未来社会を切り拓く」市民を育てるために、「何ができるか（知識・技能）」、それを「どう使うか（思考力・判断力・表現力等）」、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びに向かう力・人間性等）」の3つの資質・能力の育成を重視して行われた。^{*1}これは、歴史的分野は、歴史を学ぶことによって、「あること」ができるようになるための「実技教科」であることを明確にしたといえる。では、どのようなことができるようになると良いのか。また、どのようにしてそれをできるようにするのだろうか。

2 穴埋め問題、穴をどこにするか？

次の文章をもとに「穴埋め問題」をつくらうとき、あなたはどこを空欄にするだろうか。

われらは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであって、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立たうとする各国の責務であると信ずる。（日本国憲法前文より）

「国家」や「主権」などの用語だろうか。「普遍的」や「対等関係」のような形容動詞や名詞だろうか。これらに比較すると少数派だが、「無視してはならない」や「維持し」、「信ずる」のような動詞を空欄にするパターンがある。実は、

社会科の学習では動詞が重要な意味をもっている。なぜなら、社会科は、平和的で民主的に行動できる市民（国民）の育成を目的とした教科だからである。ぜひ動詞に着目してみしてほしい。

動詞に着目すると、生徒の問いが深まる効果もある。「〇〇した」という行為に注目すると、「だれが〇〇したのか?」、「いつ?」、「どこで?」……と、5W1Hの問いへと深まっていくのである。これらの答えをまとめて順序よく説明できれば、「〇〇した」できごとを理解できたことになる。教科書を使って、生徒がこのような学習活動にチャレンジする簡単な方法がある。

3 根拠をあげて説明し、見出しをつける学習

図は、『社会科 中学生の歴史』（以下、教科書）p.238～239である。教師は次のように指示をする。

「このページには三つの小見出しがある。それぞれ1か所ずつ、あなたが重要だと思うところに下線を引こう」

「次に、下線を引いたところと最も関係のある資料を、この2ページのなかから一つずつ選んで、線で結ぼう」

「選んだ資料を使って、あなたが下線を引いたところが重要だと考える理由を、ペアやグループで説明しよう」

「さらに、三つの小見出しすべてにかかる見出しの一つを考えよう。教科書の『敗戦からの出発』という見出しと似ていても、まったく違っていても良い。オリジナルの見出しを考えてみよう」

「自分がつけた見出しと、その見出しを考えた理由をペアやグループで説明しよう。なお、説明の際は自分が選んだ資料を使おう」



図 『社会科 中学生の歴史』 p.238～239 「敗戦からの出発」

なるための実技教科」と見なすことである。教師が指示し、教師が重要だと思ふところに下線を引かせるのでなく、生徒が自分で線を引く箇所を選んでみる。そのとき、動詞部分に注目させてみる。そして、生徒自身が教科書の資料を使って、あるいは発展として年表や地図を自作して歴史を説明する。対話を通じて説明の精度を高めたり、視点を広げたりする。

新学習指導要領の特色は、社会科学習における生徒自身の技能の習得と活用が必要なことを明確に示している点にある。その技能の例が表である。意識して実践に取り組みたい。

表 新学習指導要領にみる調べまどめる技能の例^{*3}

	技能の例
情報の収集	【調査活動】(略) 【資料活用】(略) 【情報手段の特性や情報の正しさへの留意】 ○資料の表題、出典、年代、作成者などを確認し、その信頼性を踏まえつつ情報を集める ○情報手段の特性に留意して情報を集める ○情報発信者の意図、発信過程などに留意して情報を集める
	【情報全体の傾向性を踏まえる】(略) 【必要な情報の選択】 ○事実を正確に読み取る(詳細略) ○有用な情報を選んで読み取る ・学習上の課題の解決につながる情報を読み取る ・諸情報の中から、目的に応じた情報を選別して読み取る ○信頼できる情報について読み取る 【複数の情報を見比べたり結び付けたりする】 ○時期や範囲の異なる(地域の様子などの)情報を見比べたり、結び付けたりして読み取る ○同一の事象に関する異なる資料(グラフと文章など)の情報を見比べたり結び付けたりして読み取る ○同種の資料における異なる表現(複数の地図、複数のグラフ、複数の新聞など)を見比べたり結び付けたりして読み取る 【資料の特性への留意】 ○地図の主題や示された情報の種類を踏まえて読み取る ○歴史資料の作成目的、作成時期、作成者を踏まえて読み取る ○統計等の単位や比率を踏まえて読み取る
情報の読み取り	【基礎資料の整理】(略) 【分類・整理】 ○項目やカテゴリなどに整理してまとめる ○順序や因果関係などで整理して年表にまとめる ○位置や方位、範囲などで整理して白地図上にまとめる ○相互関係を整理して図(イメージマップやフローチャートなど)にまとめる ○情報機器を用いて、デジタル化した情報を統合したり、編集したりしてまとめる 【受け手に向けた分かりやすさへの留意】(略)
情報や考察の整理	

教科書の資料を使って歴史を説明する学習活動は、慣れると短時間で行うことができる。教科書と異なる見出しをつける活動も、教師の予想をこえたすどい視点で行われることもある。

異なる視点にたてば異なる見出しがつけられる例として、昔話の『桃太郎』があげられることがある。例えば、鬼たちの立場で新聞がつけられたら、「桃太郎、鬼ヶ島を侵略——財宝を強奪、死者多数」という見出しになるかもしれない。経済新聞なら、「きびだんご株価急上昇——『千人力』桃太郎」。犬や猿の立場なら、「ブラック企業、桃太郎? だんご一個で危険業務」。スポーツ記事なら、「桃太郎ドーピング疑惑——謎のだんご、ありえぬ力」。科学記事なら、「桃からスーパー赤ちゃん——えっ、果物から? 世界に衝撃」のように、一つのできごとでも複数の異なる切り口(解釈)がある^{*2}。生徒が教科書のどこに興味をもち、どのように考えたか、それを確認できる活動である。

平和的・民主的市民(国民)は、他者に寛容性をもつ社会人である。社会科授業そのものが、他者の異なる視点に気づく活動が行われる場となること。それが教科の基本を大切にす教師にとっての留意点である。

4 新学習指導要領への対応

これまで述べたように、現行の教科書を使っても「主体的・対話的で深い学び」となる学習活動はできる。授業者の視点として重要なのは、歴史的分野を「生徒が歴史を説明できるように

5 予想される

「主体的・対話的で深い学び」の課題

新学習指導要領で強調される「主体的・対話的で深い学び」への批判は、おもに次の二つである。

(1) 時間がたりない

「対話型の授業では、用語を教える時間がたりなくなる」という不安の原因の一つは、教師が教科書の用語をすべて覚えさせなければならぬと考えていることである。前述したように、主体的な学びは、必然的に5W1Hで生徒自身がノートにまとめていく活動になる。その過程で歴史用語を用いて因果関係を説明することが重要であって、たとえば年表は覚えるものではなく、生徒自身が説明用につくるものである。みずから資料をつくって説明する時間は、教師の板書を書写する活動以上の効果が得られる。

もう一つの原因は、授業を単元として考えないで、1時限単位で考えていることである。教科書の一章を一つのまとまりのある単元として、生徒の活動を中心とした単元の指導計画をつくるのが解決策となる。例えば、第1時は疑問を発見させ、第2時で疑問への仮説を考え、それを証明し、新聞やポスターなどの資料を作成するための計画を立てる。第3時では資料をみずから作成し、第4時で発表し意見の交流をはかる……といった計画である。現行の教科書で「主体的・対話的で深い学び」をめざす方法として、こうした単元計画を立ててみてほしい。

(2) 入試に役立たない

大学入試センター試験が、2020年度から大学入学共通テストに変わる。新テストに向けたプレテストの問題が大学入試センターのウェブサイト上で正答とともに公開されている^{※4}。論理的考察が必要な問題が多く、また、対話的授業を前提とした出題形式となっている。いわゆる「知

識問題」も単に語句を選ぶようなものではなく、説明力を問う。つまり、ほんとうに理解しているかを問う問題が指向されている。

国立教育政策研究所の「全国学力・学習状況調査」^{※5}によれば、「学級の友達と〔生徒〕の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか」という質問に肯定的に回答した児童生徒のほうが、平均正答率が高い傾向がみられた。また、教員への「習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか」との質問に肯定的に回答した小中学校のほうが、平均正答率が高いという結果も出ている。対話的授業が学力を向上させることが明らかになったとあって良いだろう。

6 終わりに

これまで述べたように、社会科は、「暗記教科」から「実技教科」へ変わることを求められている。その第一歩は、生徒たち自身に歴史を説明する機会を与えることである。そのとき、説明の根拠としての教科書の役割はよりいっそう大きくなるだろう。

〈参考文献等〉

- ※1 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』 p.2～3
- ※2 新聞見出し例は中日新聞社との共同による愛知教育大学教員免許更新講習資料より一部引用
- ※3 「中央教育審議会教育課程部会 社会・地理歴史・公民ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」（平成28年8月26日）資料7をもとに、一部省略、表現を改めた。詳細は、『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 社会編』 p.186～187
- ※4 独立行政法人大学入試センター「大学入学共通テスト（新テスト）等について」（https://www.dnc.ac.jp/sp/daigakunyugakukibousyagakuryokuhyo_ka_test/index.html）
- ※5 国立教育政策研究所「平成30年度全国学力・学習状況調査の結果」（<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/setsumeikai/30setsumeikai/18ers.pdf>）